

## 第51号（生物相調査報告）発刊にあたって

国立科学博物館動物研究部脊椎動物研究グループ  
兼、附属自然教育園都市緑地生態研究チーム  
濱尾 章二

自然教育園は大都市東京にありながら、関東地方低地の潜在自然植生である常緑広葉樹の森林が見られる貴重な緑地である。歴史をたどってみると、江戸時代には大名の下屋敷であり、その後、明治時代には軍の火薬庫、大正時代には皇室財産（白金御料地）であった。第二次大戦後、天然記念物に指定され、1949年に国立自然教育園として公開された。そして、1962年には国立科学博物館の附属施設となった。開園当時は草地やマツ林、落葉樹林が広がる部分もあったが、現在は遷移が進み常緑広葉樹の林となっている。東京には皇居をはじめ明治神宮、新宿御苑などの緑地があるが、自然教育園の特徴は植栽や林床の刈り払いを行わず、少なくとも一定面積は過去からずっと森林であり続け、ここ数十年はほとんど手が加えられていないことである。そのため、関東地方の低地の原生林の姿をとどめている。

国立科学博物館は、この自然教育園を生物相のモニタリングサイトと位置づけ、1977～79年と1998～2000年の2回、大規模な調査を行なった。2回目の調査から20年近くが経過し、この度平成28～30年度（2016～18年）の事業として生物相調査を行なった。目標は網羅的モニタリング、すなわちできるだけ多くの分類群において現時点で生息する生物種をリストアップすることである。同時に、可能な限り生物相の変遷を明らかにすることを目指した。そのため館内の研究者（動物研究部15名、植物研究部7名）はもとより非常勤職員・名誉研究員（計9名）、館外の研究者（27名）の参画、さらに多くの方の協力を得て実施されたのがこの調査である。

『自然教育園報告』第51号は、この生物相調査の報告論文をまとめたものである。東京都心に残された緑地に生息する動物・植物・菌類を総覧する資料として、またこれら生物の生息状況の現状を理解するために利用していただきたい。また、生物相調査で記録された生物の情報は電子化し、データベースとして公開される。各分類群で採集、記録された生物の詳細な情報が掲載されているので、論文と合わせて利用していただきたい。